

19年目の小旅行

生田真人

今年の夏で、大学院を中退してから19年目だ。東京で助手の職を得てからは日々あくせくと暮らして、またたく間に年月がたった。大学院時代の自由で刺激的な学習体験が、その後の職業生活を支えてくれた。私は、独自の歴史風土は持つのだが、明治以降の近代化につれて個性が薄れてしまった地方都市鹿児島で学生時代を過ごしたので、大都市大阪と市大地理学教室は新鮮だった。時のたつのは早いものだ。そこでふと思いついて、学部学生の頃しばしば出かけたあてのない旅行に出かけることにした。その頃は大学にはあまり行かず、よく貧乏旅行をした。しかし今は独り身ではなく娘連れではあったが、とにかく出かけることにした。とりあえずの目的地は、兵庫県但馬の出石町だ。JR西日本が城崎温泉と城下町出石町とをセットにしたキャンペーンを張っており、通勤途上に偶然そのパンフレットを手に入れたからだ。



もより駅の豊岡まで京都から特急で2時間あまりの行程だ。わずらわしい日常から抜け出すにはこれくらいの時間は必要だ。流れゆく窓外に目をやると、真夏の強い日差しの中で山の緑が妙に新鮮だ。夏は真っ盛りだ。電車はやがて但馬に入り、カバンで知られる豊岡市に着いた。カバン産業は一時ほどの勢いはないようだが、大産地の面影は豊岡駅前から長く続く商店街に現れている。

駅前で時間をつぶして出石行きのバスに乗る。バスで30分ほど山間に入ると、2つの川の合流点に城下町が広がる。町の中心のターミナルについたが、ターミナルとはいっても古い待合室に木の長いすが2、3おいてあるだけのひなびたものだ。出石は、但馬随一の城下町で5.9万石だというのが、その割には城下は小じんまりとしている。JR西日本のキャンペーンのせいか観光客も目に付く。鉄道会社の宣伝力は大きいものがある。

出石城は山城で、この地に1706年に仙石政明が信州上田から転封してきた。出石といえば「そば」を思い浮かべるが、それは政明がそば職人を連れて出石に移ってきたからだという。城下町の開発は、明治以降の上からの都市開発よりももっと厳しい身分社会の強制開発ではあったけれども、出石でそばを楽しむのは政明のおかげだ。まちはさすがにそば屋が多い。さっそく近くのそば屋に入る。

城下町の形成は16世紀から17世紀前半のようだが、ここの町人まちは独特だ。普通の城下とは配置が逆で、城に近い部分が町人まちである。そして、その外側に侍屋敷を配置した独特の町割だ。町は遠見遮断を取り入れた方格の街路となっている。

まちが小さいだけに、見物は自転車でも充分だ。レンタサイクルを借りて、まちを回る。日常を忘れるために目的地も定かに決めずじぶらりと旅であったはずなのに、いつのまにやら巡検のようになってきた。城下は、出石川とその支流が合流するところに作られた。足軽町が、谷山川と出石川の間に広がっていた。2つの川は城の掘割の代わり役目を担ったものだ。谷山川の河川景観の形成もひと通

り終わっている。

日本の近代化を進める上で大きな役割を果たした鉄道はこの町を回避してかけぬけた。地形的な制約のせいがあるいは、出石の実力者層の反対があったからなのかどうかは知らぬが、鉄道はこのまちを回避した。まちは時代の変遷に漂って、他の地方小都市と同じように変化した。ただし、近くにカバンという成長産業があったから、人口流出は過疎地域の小都市などに比べればまだ少なかったのではないか。

出石町は今、まちづくりの真っ最中だ。まちの規模が小さいだけに商店や居住者間での合意形成は比較的容易だ。小回りのきいたまちづくりができる。このまちの景観統一の試みはおもしろい。屋根瓦の色彩を統一し、道路カラー舗装にするだけでも歩く人の心理に訴えるものが創られる。そして、城下町が時間をかけて生み出した産品を売る土産物屋が店を出す。

観光開発に必要なのは観光資源の発掘や創出だが、もう一方の柱は宿泊施設だ。この点、出石町には客室が100ほどもある都市型ホテルが立地する。まちの規模に比べれば不釣り合いに大きいしろものだ。このホテルを経営する企業は、宝塚や三田でホテルやレストランなどの事業を展開してきたらしい。ホテルが立地した経緯は知らないが、町や県などの誘致によるものにちがいない。あるいはこのホテルの経営者が出石町出身であったのかも知れぬ。

工場進出が望み薄となってきた現代には、工場以外の何かを誘致するか、あるいはなんとかして雇用を創出するしかない。ホテルもさまざまの雇用を生み出す魅力的な雇用機会だ。JR西日本のキャンペーンは、出石の観光に大きなインパクトを与えているようだ。今や民間企業となったこの鉄道会社が消費者に向けてキャンペーンを打ち出したのは、出石町の観光基盤と施設とが一定レベルに達したとみたからだろう。

その夜、上記の都市型ホテルの1室であれこれ考えて、同じような城下町の篠山に行ってみることにした。翌日、豊岡駅まで戻って電車に乗った。豊岡からもよりの篠山口駅までは、特急で1時間半ほどかかる。篠山もまた鉄道が通らなかつたために城下町の景観が色濃く残る。篠山口を降りてバスで出石とちょうど同じ30分ほどバスに乗る。篠山口駅近くの丘陵部には新興の住宅団地ができていた。篠山はこの春に町から市に昇格したが、京阪神都市圏の都市化前線となっているらしい。

篠山は「篠山」という丘陵に天下普請で城が築かれた。城下町であるだけに、市内の随所に観光資源があり、特産品も多い。篠山もまた観光開発を進めている。商工会議所はまちの真中に市内でつくられるみやげ物の販売施設を創った。熱心な観光開発の姿勢は、その施設を見ただけで分かる。これとって産業のない小都市が産業を発展させるには、工業開発の次の時代は観光開発ということなのであろうか。さまざまな都市がそれに取り組むので、都市間競争は避けられない。

観光まちづくりとしては、現段階では出石が篠山よりも一歩先を行く。この違いには、まちの規模ということも影響しているようだ。篠山はこの春に町から市に昇格しただけに人口も多く、産業集積の規模は出石よりも大きい。このため観光資源はさまざまあっても、規制などを伴うようなまちづくりは難しい。利害関係者が多くて意見が多様であるために、合意形成が難しいからだ。堂々たる城跡が残り、武家屋敷や町人町の風情の残るけれども、都市という複雑な組織体にインパクトを与えるような総合的で大規模な事業は、容易には実施できない。それに、出石にあったような適切な宿泊施設がないし、京阪神都市圏に近すぎる。むしろ、都市圏の一部となっている。出石では大都市圏から脱出

したという印象を持ったけれども、篠山ではそうではない。京阪神大都市圏の中との感じをぬぐうことはできない。そんな思いを持ちながら篠山口から電車に乗った。

観光開発は、今の職場に移って接するようになった学生さんのゼミ報告や卒業論文のテーマにもよく取りあげられる。かつての全国津々浦々に渡るリゾート開発ブームはバブル経済の終焉とともに破綻したが、その後、観光開発は地域開発の手段として定着してきたようだ。学生さんの関心は、世相の変化を敏感に反映する。

ところで、経済研究所にいた頃、私は教育に依存した地理学のありようについてはどちらかというところ冷やかであった。ところが、経済から地理学教室に移るとそうもいってはおれなくなった。中には熱心な学生さんもいて、自分のやろうとしていることが地理学か、あるいは地理学でないかわからぬなどと言われると、一緒に悩むことになる。地理学はなにしろふところの深い学問で、体系的が欠如している代わりに間口は広い。その方法論を鍛えるひとつの方法は、政策論だと思う。地理学の伝統的な取り組みを考慮するとすれば、自然地理的要素も視野に入ってくる地方小都市開発問題がひとつの手がかりになるように思われた。リゾート開発や地方の小都市開発論などが、地理学の既存分野を包含できるようなテーマなのかもしれない。そうだとすると、大都市圏ばかりに目を向けていた自分のこれまでの姿勢を変えなければならない。過疎地域や地方小都市、農村・農業などについて考えてみる必要がある。そんなことを想っている内に大阪駅について、大都市圏からの脱出旅行は終わった。19年目の小旅行はあっという間に終了した。娘に言われるままに土産をしこたま買ったので、出費の方は思わぬ額になってしまった。

(昭和54年修了)